

巻頭言

変革の時期～地域活性化にあたり誰の力に期待するか

作物開発・利用研究領域長 須田 郁夫

農業生産者の減少・高齢化の進行等に加えて、TPPの問題も本格化し、今まさに日本農業に大幅な変革が求められています。これらに関連して私は、新品種の活用／農作物・加工品への機能性の高付加価値化／6次産業化／国民の健康といった視点で九州・沖縄地域の活性化について考えてみました。

黒大豆、ハトムギ、ソバは、日本人を健康にする食材として古来より人気があります。九州研が開発した新品種も地域活性化の起爆剤として活用されています。黒大豆品種「クロダマル」は、苦みが少なく甘みが強く、機能性成分アントシアニンを含み、九州で栽培できる黒大豆であったこと、また関係者の努力により産地と企業との橋渡しがうまくいったことから、普及面積は平成18年の0.2haから平成25年の104haへと拡大しました。特に福岡県筑前町の町を挙げての大豆生産体制・加工販売体制の強化、50種類以上のメニュー・加工品の開発に成功したことは、筑前町への集客につながりました。またハトムギ品種「あきしずく」は、富山県氷見市が米転作作物として栽培を推奨し、ハトムギ茶のペットボトルが異例のヒット商品になったこと、また女性の肌の抗加齢に関するヒト試験の結果も公表されたことで、ペット飲料、お菓子、化粧品などの売れ行きが好調です。さらに春播きソバ品種「春のいぶき」の一大産地となった大分県豊後高田市では、観光資源「昭和の町」との連携、乾麺加工・販売、ソバ祭、ソバ打ち講習会、手打ちソバ店の認定制度等により、6次産業化が進んでいます。これら3地域での特徴は、他地域に先駆けいち早く市町村ぐるみで取り組んだこと、来て頂くと味わえますといった戦略を立てたことです。これから6次産業化を目指そうとしている地域のための模範事例になるでしょう。

6次産業化があちこちで軌道に乗ってくると、買ってくれる購買者がいるか、作ってくれる生産者がいるかと心配になりますが、カバーしてくれる方々が日本中にいます。購買者としてはお金のゆとりの出てきた団塊世代に期待しましょう。この方々は終身雇用制の中でこれまで会社に身を投じ自分を犠牲にしてきた年代層であり、今度は自分のためにお金を使おうと考えている大集団です。まして日本型食スタイルの最も良い時期とされる昭和

55年近傍に青春時代を送り健全な身体を持っていたこの方々は、最近お腹回りが気になっていますので、少々高くても買ってくれます。健康な食材が食べられると聞けば、自由な時間を使いマイカーで出かけて来てくれますので、地元産野菜

を使った飲食店やお土産店の並んだ道の駅、さらに温泉やシニア向けのアミューズメント施設が近くにあれば、お金を使ってくれるでしょう。

生産者としては経営規模が小さいなどの理由で農業を諦めかけている高齢者層に期待しましょう。この方々は、少しの収入があれば孫のために何か買ってあげようとか、自分のために日帰り温泉に行こうとか考えますので、そのことで生き甲斐を感じ、また同時に幸せホルモン（セロトニン）を出しやすくなります。さらに農業で体を動かしていますので健康体が維持され、作物が成長するのを見て感動し、鬱（うつ）にもなりにくくなります。興味深い報告があります。かつて長野県は脳卒中が多く寿命の短い県でありましたが、健康作り運動が功を奏し、今では高齢者層の就業率が全国一位で、男女ともに長寿日本一になりました。もっとお年寄りの方々に活躍していただきましょう。そうすれば日本の財政を圧迫している老人医療費も削減できるでしょう。

働き盛りの農業者は大規模経営で安定した収入を得、お年寄りには生き甲斐を持って働いて健康寿命を延ばして医療費の軽減に貢献して頂きましょう。また、これらの方々が収穫した農産物は道の駅などに山積みして団塊世代の人たちに買って頂きましょう。さらには健康長寿国日本の食文化がここで味わえますというキャッチコピーをもって外国からの観光客にも来て頂きましょう。そして最後に、これからを担う研究機関また行政の若い方々はこの夢が実現できるようなアイデアを出して頂きましょう。お互いの力を寄せ合わせれば地域活性化は可能です。

（編集注：2013年9月30日付で退職されました。）

